沈黙をもたらす者

沈黙の春　高校一年　宮内　楓菜

外国での出来事について書かれた作品を読むとき、書かれている情景を自国の景色に変換して連想することはないだろうか。挙げられているほとんどの事例がアメリカのものであるこの作品を読みながら、私は自然とそれらの事例を日本の環境で連想してみた。そうして私が最初に思い出したのは水俣病だ。食物連鎖の頂点に立ち、自然に好き放題手を出してきた人間。しかし他の生物を化学物質で侵せば侵すほど、巡り巡ってその生物を口にする自分たちまでもが化学物質に侵される。最後に被害を被るのは必ず人間だという不変の事実の現れである。それは本文の言葉にもはっきり示されている。「おそろしい武器を考え出してはその鋒先を昆虫に向けていたが、それは、ほかならぬ私たち人間の住む地球そのものに向けられていたのだ。」人間はただ害虫を駆除したい、ただそれだけだったにも

かかわらず、殺虫剤を使っても本来の目的は完遂せず、その代わりに周りの生態系ばかりが崩れていく。二兎を追う者は一兎をも得ずということわざがあるが、この場合「一兎を追う者が二兎を失う」という状況になっている。対償が大きいようにも感じるが、自然を操るということは、そういうものなのかもしれない。自然環境に手を出し、失敗し、違う方法でもう一度、また失敗、といういたちごっこの中で本来の自然は損なわれていったのではないだろうか。そうしたやり取りですぐ変化してしまうほど、自然はもろい。私のこの手は、自然のものをいとも簡単に傷つけることができてしまうのだ。こんなことができる地球の生物は、人間のみである。その恐ろしいほどの力で私たちは今、地球の至る場所に「沈黙」を作ろうとしている。まずはそれに気づかなければならない。

最後、外来生物が日本でも問題になっている。在来種の生態系を保護するため、外来生

物は発見され次第捕獲され、駆除の対象となることも多い。それは仕方のないことなのかもしれない。だが、在来種の中で人間に害をなすものを消し去ろうとするのとは別である。もとから生息する生物は、たとえ人間にとって嬉しい存在でなくとも、生態系を構成する欠かすことのできない存在だ。地域での生活を良くするために使った化学薬品が地域の生態系を破壊することになるという、なんとも皮肉な事例が多く見られた。かと言って、それの具体的な解決策は多く示されているわけではない。絶対に環境への影響が出ない方法も、人間が妥協できるような方法も、現状ないのである。それに至っては読んでも分からなかった。ただ考え続けることしか、結局できないのかもしれない。

地域の緑を蝕む化学薬品の恐ろしさがたて続けに書かれているこの作品において、せめてもの救いだったのは、現状を問題だとして自治体や政府に対し声をあげた住民がたくさ

んいたということだ。自分たちの生活を改適にするためなら仕方ないと妥協しなかった住民たちの、日頃から自然を愛でる心が形となって表れた結果は、かなり大きいものである。そういった住民たちの声があがるまで、政府は地域の異変に気づかなかったのか。批判したいところではあるが、薬品による生物の大量死というのは、確かにその地域ごとで起きるものであり、環境問題としてはマイナーな方なのではないかと思う。そこで私は見方を変え、筆者がこう言いたいのではないかと考察した。「私たちが知らずに鉾先を向けたこの地球で起きるいかなる規模の環境問題も、始まりは地域である。たくさんの『地域の自然の異変』が積み重なったものこそが鉾先を向けた結果であり、今日の地球環境問題なのだ」と。

現代の地球で生きる人間に足りていないのは謙虚さだと思う。私たちは化学薬品の弊害によって少しずつ顕著に壊される自然に対し

胸を痛めながらも、化学薬品がもたらす健康という恩恵を受けている。それ自体は悪くないが、人間が自らの科学技術に酔いしれていることは紛れもない事実である。しかし今までの例を見ると、殺そうとした生物は残り、代わりに別の生物が消え去るという下手な鉄砲のようなヘマをいくつもしてきた。つまり人間は、自然との付き合い方が下手すぎる。こんな状態で自然を意のままに操る資格などハナからないのである。そもそもそれを自覚しないことには、環境保全はいつまで経っても始まらない。人間は確かに食物連鎖の頂点にいるが、思っているよりずっと弱くて、地球を所有しているわけでもない。人間は本来、自然環境を変えるべきではない。ただ、自然環境をここまで悪化させた以上、元に戻す義務があるのもまた人間である。無力な私たちが地球において唯一可能なのは、環境をこれ以上悪化させない、再び「沈黙」を作らない努力をすることなのではないだろうか。